

1X-8

インターネット上のコミュニケーション 環境を利用した授業構成に関する研究

土屋華[†] 馬場秀行[‡] 高橋尚子[†] 加藤泰久[†] 福原美三[†]

NTT[†] 慶應義塾女子高等学校[‡]

1.はじめに

インターネットの普及に伴い、授業でインターネットを使用した授業形態をとる学校が増えてきた。しかし情報教育以外の科目において、インターネットをツールとして利用した授業カリキュラムの作成のノウハウは未だ確立されていない。この理由としては、教師がコンピュータリテラシーを教えるレベルにないこと、教育現場にあったハードウェア・ソフトウェアが無いこと等が挙げられる。本稿ではコンピュータ初心者を対象としたインターネットを用いた英語教育における授業構成のモデルを提案する。さらに、本モデルに基づきカリキュラム・学習環境を企画し、実践授業を実施し、その結果を報告する。

2.協調学習モデル

インターネットを英語教育で用いる効用としては、次のような点が考えられる。

- 世界中のタイムリーな情報を教材にできる
- ネットワークを利用した様々なコミュニケーションが可能である
- 自分の意見を発表する場を持てる

英語授業の中でコンピュータ初心者にインターネットを使用させる場合、英語の習得を妨げずに段階的に導入する必要がある。そこでこの協調学習モデルを提案する(図1参照)。本モデルの特徴としては、以下の点があげられる。

- ネットワーク利用ビギナーへの段階的コンピュータ利用教授法、
- コミュニケーションの導入
- 情報リテラシーの学習カリキュラムに合わせた英語学習法の段階的教授

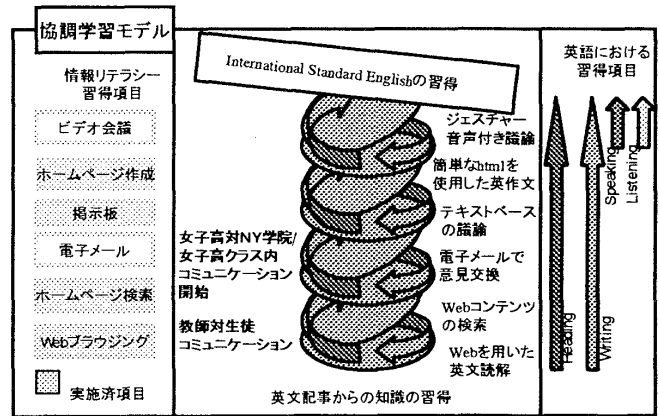


図1: 協調学習モデル

3.実験の環境・対象

今回の実験は、慶應女子高等学校の3年生の英語授業(19名)を対象に行う。この英語授業においては、International Standard English(国際的かつ公式に通用する英語)の習得が目標とされる。実験期間は、1998年6月~1999年3月で、週1回の100分授業である。英語科の教師がコンピュータに詳しくないため、授業進行・英語の教授を主に担当し、その他インターネットの指導をサポートをするものを2名置き、チーム・ティーチング制をとる。また慶應義塾内のSFC中・高等部、慶應NY校と慶應大学SFCキャンパスがコラボレーション協力を行う。

5.カリキュラム

1回の授業において、次の3つのステップを行う。

- (1) インターネットリテラシーの講義と実践
- (2) 興味のある記事・テーマを選定・読解
- (3) 感想文の作成・提出

感想文をワープロソフトの代わりに掲示板を使用して書くなど、習得したインターネットリテラシー項目によって段階的に作業方法を発展させていく。

授業スケジュールは以下の通りである。

1998. 7月: ウェブブラウザの使用方法

サーチエンジンの使用方法

ワープロソフトを使って感想を提出

8月: 第1回 HTML 講座(希望者のみ)

The Method Of Learning Internet Literacy In English Lessons
Hana Tsuchiya[†], Hideyuki Baba[‡], Naoko Takahashi[†],
Yasuyuki Kato[†], Yoshimi Fukuhara[†]
NTT[†], Keio Girls' High School[‡]

- 9月:ホームページ作成(感想の書き込み)
 10月:掲示板の使用方法
 第2回HTML講座(希望者のみ)
 SFC中・高等学校と掲示板で交流開始
 11月:SFC大学英語授業と掲示板で交流開始
 12月:NY校と掲示板で交流開始
 1999年1月以降:ビデオ会議

6.結果

アンケート、インタビュー、ビデオ記録による授業の観察、生徒のアウトプットなどを評価し、本実験において次のような結果を得る。

授業回数:14回計23h(+18h自由参加)

- (1)インターネットの導入によって生徒の興味を引き、学習に意欲を持たせる。単調であった英語の習得にインターネットを導入することによって両方に興味を持つ。この授業が良いというアンケートの回答は84%である。
 (2)今回の授業によって特にReading, Writingのスキルが上達する。しかし、新しい技術を学ぶ毎に英語に割く時間が減少し、効率が下がる(図2参照)。

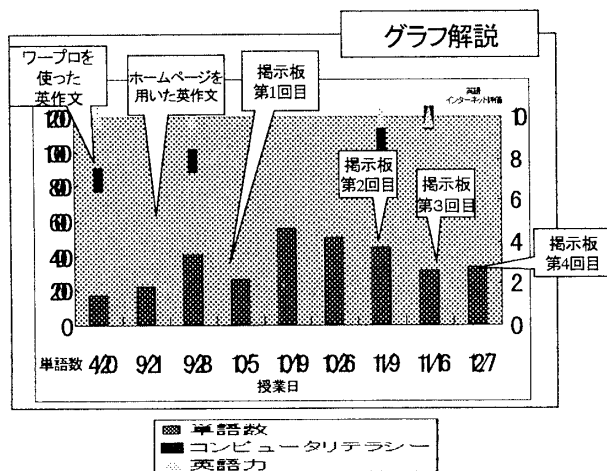


図2 英単語数で見える英語の上達率

(3)コミュニケーション要素を授業に導入することにより、情報発信に興味を持つ生徒が出現する。自由参加のホームページ作成講座には19人中11人が参加し、個人のページを作成して情報発信を行っている。他校からのリアクションがある授業にはとりわけ熱心に取り組む。

参考:掲示板への書き込み平均単語数

第1回:6.2 第2回:63.4 第3回:203.5 第4回:312

第2回~4回は他校とのコラボレーションに使用する。

(4)今回の実験では、インターネット上から検索し、テーマを選定するという段階で生徒が時間を費す(平均:100分中27.4分)。膨大な情報からテーマを選定するのが困難であることと、操作技術の習得に時間がかかることが理由として挙げられる。

(5)英語とインターネットリテラシーの習得を同時に行う手法については、生徒の意見は半々である。半数が中途半端になってしまうので、先にインターネットリテラシーを学びたいとアンケートに回答している。その反面、同時に学習する方が楽しく、意欲が持てるという意見もある。

7.問題点

今回の実験において、カリキュラム面、授業実践面で以下の問題がある。

(1)カリキュラムの問題点

毎回の授業で取り扱うテーマは生徒が自由に設定できるが、選択するのに時間をとられ、また時事問題より身近な話題に終始することが多い。また今回の実験では十分なコミュニケーション環境を用意できず、掲示板での他校との交流になる。予め授業スケジュールを決めているので欠席した生徒や、理解できなかった生徒をフォローする仕組みがなく、対応が困難である。クラスのホームページを唯一のガイドとして使用するが、授業のナビゲーションが困難である。

(2)授業実践面での問題点

新しいコミュニケーション導入に理解を得られず、コラボレーションを学校間で行うのが困難である。学校のネットワーク整備が大幅に遅れたため当初の授業スケジュールを変更する。またクラスの担当が英語科の教師であるため、生徒に教授する前にまず教師への指導が必要である。

8.新規提案及び改良点

上記で述べた問題点を解決するために、新規提案及び改良点を述べる。実験にあたって、クラス内の生徒のコミュニティ形成とともに、教師と生徒、学校内の教師間においては学校間でのコミュニティの確立が必要である。メーリングリスト等を用いた密なコミュニケーションが求められる。授業のホームページについては、生徒のページの他に、授業のオンラインマニュアル、CALAT*教材によるコンピュータ基本講習等を含んだ新しい形態が必要である。また、情報教育以外の担当の教師へ向けたコンピュータリテラシー講習が行われるべきである。

9.おわりに

今年度の実験終了後は、Help Deskとして電子メール等で対応し、来年度の実験を続け評価を引き続き行っていく予定である。

参考文献

- * 仲林ら:WWWを用いた知的CAIシステム、信学論D-II, Vol.1, J80-D-II, No.4(1997)pp.906-914.